様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １３ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５８００８４

研究課題名（和文）社会への実践的還元を目指した日本語テクストの批判的談話分析基礎研究

研究課題名（英文）A Study of Critical Discourse Analysis for returning it's profits to society.

研究代表者
名嶋　義直（NAJIMA, Yoshinao）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：６０３５９５５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本語で書かれた新聞記事を批判的談話分析の観点から分析し，そこに自然な形で取り込まれているさまざまな意図と実践を明らかにした。それを通して，情報をいかに受け取り，理解し，活用するかというメディア・リテラシーの重要性を発信した。研究成果は，編著書籍・書籍収録論文・紀要・口頭発表・国際シンポジウムなどの形で社会に公開し，その成果を還元した。

研究成果の概要（英文）：I analyzed newspaper articles written in Japanese from the viewpoint of critical discourse analysis. I clarified various intentions and practice taken in in natural form there. Through it, I showed how we should accept the information, how we should understand the information, and how we use the information. Also I asserted the importance of the media literacy. The results of research showed it in the form such as a compilation book, a book collecting article, a bulletin, a presentation, the international symposium in the society. I returned the result for the society.

研究分野：批判的談話研究

キーワード：批判的談話分析　メディア・リテラシー　社会的な内容のテクスト

１．研究開始当初の背景

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と福島第一原発事故は私たちの社会を大きく変え、これまで当然視していたものを批判的に再検討することの重要性を知らしめた。とはいえ、職業的な要請によらない多くの一般市民は情報をそれほど厳密に理解しようと試みているわけではない。しかし、市民として自立するためには「情報に惑わされず主体的に的確な判断ができる能力」が不可欠である。近年の学校教育でも指摘されているように、「コミュニケーション力」や「論理性」は非常に重要である。研究の成果を社会に還元することを目標とした「社会と関わる語用論研究」が求められていると言えよう。

２．研究の目的

(1) 一般市民が普通に入手することができる「情報」の中に、誰のどういう意図や実践が自然を装って組み込まれているか、読者が普通に読んで理解していくときに、どういう語彙や表現に影響を受けて解釈を形成する可能性があるかについて数多くのテクストを分析する。

(2) その分析を通して得られた知見を、メディア・リテラシーの涵養のために社会に公開し、広く還元する。

３．研究の方法

(1) 市民がごく普通に接することのできる新聞記事を主な分析対象とする。新聞記事は各新聞社の Web ページから収集するが、誰もが一番最初にアクセスするであろう新着記事欄から収集する。収集先新聞は読売新聞・朝日新聞・毎日新聞・産経新聞・東京新聞である。収集方法は研究者が１日に数回 Web サイトにアクセスして閲覧し、手作業で配信記事を記録した。その中から、話題やその時の社会情勢、分析の意義などを総合的に判断し、分析対象の記事を選定した。

(2) 分析の枠組みは批判的談話分析（Critical Discourse Analysis, 以下 CDA）を採用した。CDA は、ことばや視覚情報を批判的に分析することを通して、暗示的なものを顕在化させることができる分析の枠組みである。また CDA は,社会の問題に目を向け、弱者側に立ち、権力の意図と実践を明るみに出し、それと向き合う方法を考え、最終的には社会変革のために行動することを目標としてる。以上の理由で、分析の枠組みとして最適であると判断したからである。

(3) 分析は個人で行ったが、研究成果の公開に際しては柔軟な姿勢をとることとした。学会などで交流をもった研究者やそのネットワークを活用し、共同で書籍を執筆したり、パネルセッションを行う等の手法も取り入れることとした。

４．研究成果

研究成果は大きく４つの観点からとらえることができる。

(1) まず、日本語研究における CDA の可能性を示すことができた点である。CDA はヨーロッパを中心に実践されている研究である。CDA に取り組んでいる日本人研究者もいるが、政治的な内容のテクストを扱うことが多かったり、支配被支配や権力といったものと向き合う関係で、研究分野内にとどまっている印象があった。しかし、本研究では当初から研究成果を社会に実践的な形で還元することを目的にしており、積極的な発信を行った。

(2) 次に成果と言えるのは、力でもって他者を支配したりコントロールしたりしようとする人々や集団が、どのような意図を持ち、どのように談話を生み出し、メディアとの関わりを通して、どのような支配行動を実践しているのかを具体的に明らかにできた点である。本研究が分析のために取り上げた談話の話題は、原発事故・特定秘密保護法・沖縄辺野古の基地問題・戦後 70 年談話など多岐にわたる。それらの分析を通して、談話の中の、何に着目し、どう読めば、誰の、どのような意図や実践が見えるのかを、談話構成や話題展開というマクロ面と言語形式や慣用表現などのミクロ面との双方から明らかにすることができた。これらの成果は、批判的なメディア・リテラシー教育にも応用できるものである。

(3) 言語学的な研究成果だけではなく、研究成果の社会への公開という点でも大きな成果をあげることができた。書籍の出版・国際シンポジウムの企画開催・学際的な組織での講演や発表・他団体による市民向けシンポジウムでの登壇などを通して、これまで言語学や批判的談話分析というものに接する機会がなかった人々に、研究成果とその成果を活用について発信することができた。

(4) 研究を遂行する途上で、EU における民主的シティズンシップ教育の研究者と交流する機会があり、それをきっかけにして、CDA の持つ言語教育での可能性について考えるようになり、研究成果を言語教育関係の研究会や学会で積極的に発表を行った。また、所属先のカリキュラムにおいて CDA の授業を開講し、批判的な思考力の涵養にも務めることができた。特に後者は、論文や口頭発表という形ではないが、「分析を通して得られた知見をメディア・リテラシーの涵養のために社会に公開し広く還元する」という本研究の目的から見て，非常に意義のあることであると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
①名嶋　義直、福島第一原子力発電所事故に関する新聞記事報道が社会にもたらす効果について、ハノイ大学第二回国際シンポジウム紀要、ハノイ大学、査読有、2013、247-260

②名嶋　義直、特定秘密保護法に関する記者会見記事の批判的談話分析－ ミクロ面の分析を中心に －、文化、東北大学文学会、査読なし、78 巻 3・4 号、2015、1-24

③名嶋　義直、無料配布の観光案内小冊子に見る関西電力の談話実践―批判的談話分析の観点から―、文化、東北大学文学会、査読なし、79 巻 1・2 号、2015、25-46

④名嶋　義直、辺野古新基地建設をめぐる社説の批判的談話分析–日本語教育への展開を視野に–、東北大学文学研究科研究年報、東北大学文学研究科、査読なし、第 65 号、2016、198-220

⑤名嶋　義直、「反・脱原発」の談話行動について―社説の分析を通して―、延辺大学日本語言文化研究、延吉大学出版社、第四輯, 査読有、2016、印刷中

⑥名嶋　義直、安倍首相の戦後７０年談話について―批判的談話分析の試み―、文化、東北大学文学会、査読なし、79 巻 3・4 号、2016、印刷中

〔学会発表〕（計１７件）
①NAJIMA　Yoshinao, Critical Discourse Analysis of Newspaper Articles about the Fukushima Nuclear Power Plant Accident - How the Power is Going to be Maintained -,（poster presentation）, International Pragmatics Association 13th Conference, 2013.9.8-13, New Delhi (India)

②名嶋　義直、福島第一原子力発電所事故に関する新聞記事報道が社会にもたらす効果について、ハノイ大学主催第二回国際シンポジウム、2013.10.15. ハノイ大学（ベトナム）

③名嶋　義直、語用論・批判的談話分析から見えてくるもの － 読解教育への展開を視野に －、沖縄県日本語教育研究会 第 11 回大会、2014.2.22、琉球大学（沖縄県西原町）

④名嶋 義直、食の放射能汚染に関する情報はいかに報道されたか — 新たな安全神話の構築 —、名嶋 義直・高木　佐知子・神田靖子「パネルセッション：日本研究と読解教育との橋渡し―社会的なテクストの潜在的可能性―」、ICJLE 2014 日本語教育国際研究大会、2014.7.11、シドニー工科大学（オーストラリア）

⑤名嶋　義直、新聞記事における誘導に関する一考察 –話題や言語形式に着目して–、第 12 回日本語教育研究集会、2014.8.4 名古屋大学（愛知県名古屋市）

⑥名嶋　義直、人はいかに新聞記事を読まされるか―批判的談話分析の検証―、ポスター発表、第二回アジア未来会議、2014.8.23、ウダヤナ大学（インドネシア）

⑦名嶋　義直、読解における縦断的視点と横断的視点の重要性 － 吉田調書報道から見えるもの －、沖縄県日本語教育研究会　第 12 回大会、2015.2.28、琉球大学（沖縄県西原町）

⑧名嶋　義直、主催「国際シンポジウム：言語学者によるメディア・リテラシー研究の最前線–ポスト 3.11 の視点–」、2015.3.22、仙台国際センター（宮城県仙台市）

⑨名嶋　義直、安倍首相の特定秘密保護法に関する記者会見について、『国際シンポジウム：言語学者によるメディア・リテラシー研究の最前線–ポスト 3.11 の視点–』、2015.3.22、仙台国際センター（宮城県仙台市）

⑩名嶋　義直、原発事故の風化とメディアとの関係 -新聞記事が読者に与える影響-、『日本科学者会議創立 50 周年記念行事 国際シンポジウム「移行:原子力から再生可能エネルギーへ」』、2015.3.29、横浜国立大学（神奈川県横浜市）

⑪名嶋　義直、「食の安全安心セミナー」配布資料に見る「内閣府食品安全委員会」のリスク・コミュニケーションについて―批判的談話分析の観点から―、『脅威の社会に服従していいのか？　リスクの社会を受け入れていいのか？　リスク・コミュニケーション　コミュニケーションの危機を語ろう』、2015.6.14, 日仏会館フランス事務所（東京都渋谷区）

⑫名嶋　義直、無料観光案内冊子の批判的談話分析–そのレイアウトを中心に–、第 13 回日本語教育研究集会、2015.8.6、名古屋大学（愛知県名古屋市）

⑬名嶋　義直、「反・脱原発」の談話行動について―社説の分析を通して―、第四回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2015.8.18、延辺大学（中国）

⑭名嶋　義直、「パネルセッションこれから

の日本語教育は何を目指すか － 民主的シティズンシップ教育の実践 －」、名嶋　義直、野呂　香代子、三輪　聖、2015 年度日本語教育学会秋季大会、2015.10.10、沖縄国際大学（沖縄県宜野湾市）

⑮名嶋　義直、社説に見る「反・脱原発」の談話行動–批判的談話分析の観点から–、日本科学者会議 第25回 東北地区シンポジウム、2015.11.8、秋田大学（秋田県秋田市）

⑯名嶋　義直，講演講師「批判的談話分析という「姿勢」と「実践」–「偏向」を誇りとして」、日本科学者会議宮城支部主催支部講座、2016.2.6、仙台市青葉区中央市民センター（宮城県仙台市）

⑰名嶋　義直，日本語教育から民主的シティズンシップ教育へ—批判的談話分析の実践から — 、沖縄県日本語教育研究会 第 13 回大会、2016.2.27、琉球大学（沖縄県西原町）

〔図書〕（計 3 件）
①名嶋　義直・神田　靖子（編）、ひつじ書房、3.11 原発事故後の公共メディアの言説を考える、2015、279

②神吉　宇一（編著）、名嶋　義直・柳田　直美・三代　純平・松尾　慎・嶋　ちはる・牛窪　隆太（著）、凡人社、日本語教育　学のデザイン、2015、27-52

③加藤　重広（編）、滝浦　真人・加藤　重広・澤田　淳・天野　みどり・山泉　実・呉泰均・尾谷　昌則・首藤　佐智子・名嶋　義直（著）、ひつじ書房、日本語語用論フォーラム第１巻、2015、249-286

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等：なし

６．研究組織
(1)研究代表者
名嶋　義直（NAJIMA Yoshinao）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：60359552

(2)研究分担者:なし

(3)連携研究者：なし